# 日本中国語学会会報　2025年12月

https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/

◆目次◆


ご挨拶　佐々木勲人（日本中国語学会会長）……2
2025 年度全国大会総括……3
ラマール・クリスティーン先生への名誉会員称号授与にあたって（小嶋美由紀）……4
理事選挙開票結果報告……5
研究例会実施報告　2025.7 - 2025.12……6
会議報告……10
研究例会および全国大会開催のお知らせ……18
事務局からのお知らせ……18

## ご挨拶　　佐々木勲人（日本中国語学会会長）

今年の全国大会は、11 月 8 日・9 日の両日、仙台の東北大学において開催されました。美しいキャンパスに 200 名を超える会員が集い、活発な研究交流が行われました。初日の懇親会には約 120 名の参加があり、仙台名物の牛タンを味わいながら、対面での交流を楽しむことができました。学会にとって、会員同士が直接顔を合わせる場がいかに大切であるかを改めて実感いたしました。準備にあたられた張佩茹先生をはじめ、東北大学の関係者のみなさまに厚く御礼申し上げます。

ここ数年、学会ではさまざまな活動のオンライン化を進めてまいりました。秋に実施している中国語学セミナーや、支部例会を発展させて新たにスタートした研究例会は、対面形式からオンライン形式に切り替えたことで参加者が大きく増えました。ご自宅から気軽に参加していただける研究交流の場を、今後も継続して提供していきたいと考えております。みなさまの積極的なご参加をお待ちしております。

一方で、全国大会のような対面形式の場も大切にしていかなければならないと感じています。発表者と質問者のやり取りだけでなく、その場の空気を肌で感じられる対面の魅力は、やはり代えがたいものがあります。

しかし近年、全国大会をお引き受けくださる大学を探すことが難しくなってきています。人員削減によりスタッフの数が減り、そこにさまざまな業務が重なる状況では、全国大会を引き受ける余裕がないというご事情はよく理解できます。学会としても、事前準備の多くを大会運営委員会が担当し、開催校のご負担をできるだけ軽減するよう努めております。専任スタッフが少ない大学でも無理なく開催していただけるようサポート体制を整えておりますので、ご関心のある方は事務局または大会運営委員会までお声がけいただければ幸いです。

2024 年 6 月、会長をお引き受けして初めてお送りしたニューズレターでは、学会の活性化について触れました。会員数の減少が続いていること、そして学会にとって最も重要な活動の一つである『中国語学』の掲載論文数が減少していることに対し、何らかの手立てが必要であると申し上げました。会員数については依然として減少傾向が続いておりますが、掲載論文数については、わずかながら改善の兆しが見えてきたように感じています。「査読指針」を定め、審査の基準とプロセスを明確にしたことが、投稿数の増加につながることを期待しております。

気がつけば、会長としての二年間が終わろうとしています。時間が加速したように感じたのは、やはり年齢のせいでしょうか。任期の終わりが見えてきた今、ようやく通常の速度に戻りつつあります。

筑波の事務局からお送りするニューズレターは、今回が最後となります。みなさま、本当にありがとうございました。少し早いですが、これをもちまして退任のご挨拶とさせていただきます。

次期会長には、京都大学の松江崇先生が就任されます。新しい会長のもと、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（2025 年 12 月 24 日記）

# 2025 年度全国大会総括

## Ⅰ．今年度大会総括

第 75 回大会は、東北大学（宮城県仙台市）を会場に、11 月 8 日（土）、9 日（日）に開催されました。

### 1. 参加者数

参加者総数は 212 名（招待者 2 名、一般参加者 210 名）、うち非会員は 17 名でした。（開催校が確認できた人数）。書籍展示は 16 社（賛助会員 12 社、非賛助会員 4 社）でした。

### 2. 総評

今大会は対面形式で開催しました。両日とも天候に恵まれ、駅直結の便利なキャンパスで活発な学術交流が行われました。

張佩茹会員を筆頭とする東北大学の教職員・学生スタッフの皆様には大会までの長期にわたり、周到な準備を行っていただきました。学生スタッフのテキパキとした対応により、滞りなく全ての日程を終えることができました。昨年まで頻繁に発生していた PC とプロジェクタをつなぐアダプターの不適合については、注意喚起や事前確認をした結果、問題は発生しませんでした。この場をお借りして東北大学のスタッフの皆様のご尽力に衷心より感謝申し上げます。

大会 1 日目は、京都大学・定延利之教授による「スキャニングから見た日本語と中国語」、大阪大学・田野村忠温名誉教授「語彙雑考」の二つの特別講演が行われました。定延教授は認知文法のスキャニング、全称量化・存在量化、モノ・デキゴトの現場的把握と品詞といった概念をもとに日中両語の違いを論じられました。田野村教授は中国語を表す中国語の名称や国名としての「中国」という呼称、また“啤酒”、“接種”などといった語の表記を多彩な資料をもとに考察されました。いずれも我々の思い込みを覆すような刺激的なご発表で、用例に真摯に向き合うことの重要性を再認識させられる思いでした。

続いて王安会員企画のワークショップが「多言語対照にみられる形容詞の主観性の諸相―日本語、中国語、英語、東アジアの言語を対象に―」と題して行われました。王会員による趣旨説明ののち、「意味機能に見る日中形容詞の主観性の相違」と題した発表がなされました。その後、張恒悦会員による「中国語の形容詞重ね型 ABB に見られる生産性の動機づけ」、上原聡・東北大学教授「東アジア言語の感情形容詞の主観性―日中語に韓国語・タイ語を加えて―」と中国語から日本語、英語、韓国語、タイ語にいたるまで議論が展開しました。3 名のご発表は有機的に関連づけられており、マクロな視点とミクロな視点を組み合わせた興味深いご発表になりました。

大会 2 日目は、分科会会場での口頭発表およびポスター発表が行われました。発表件数は招待発表 2 件、口頭発表 53 件（1 件辞退）、ポスター発表 7 件でした。また今年度は招待発表を分科会のスケジュールに組み込み、石村広会員と下地早智子理事に登壇いただきました。石村会員は「自動と使動の対立から見た使成式の形成について」と題し、チベット＝ビルマ諸語を視野に入れながら中国語の使成式（VR 構造）を論じました。下地理事は「現代中国語における垂直系時間名詞（句）の起点領域」と題し概念メタファー理論を理論的背景として空間の対立軸を指す形態素を構成要素

とする時間名詞（句）についてご発表しました。お二人は讃井唯允先生の同門でありながらその後に全く異なる研究を発展させていたことに改めて驚いた次第です。

運営に関しては、今年度も事前参加申込制を採用しました。今後とも事前申込にご協力をお願いいたします。託児所については、2 名のご利用がありました。託児所の設置は、継続的な研究活動を学会としても支援するという意味合いがあります。来年度も開催校と協力しながら、託児所を設置する予定ですので、ぜひご利用ください。

### 3. 今大会でみられた問題・課題

開催校の負担軽減策の一環として今回は対面のみで行う予定でしたが、事情により招待発表の 1 件が米国からのオンラインとなりました。その唯一のオンライン発表で回線の途絶や音声の不具合が生じる事態となりました。下地先生およびご発表をお聞きの会員の皆様に心よりお詫び申し上げます。

予稿集は PDF のみの配布とし、概ね問題なかったものの、古いバージョンの PDF ビューワーで「しおり」と「リンク」が機能していないというご報告を 1 件受けました。今後は PDF ビューワーのアップデートを呼びかけたいと存じます。また会員限定で公開されている予稿集を一般公開する要望も多く、今後前向きに検討していく所存です。

## Ⅱ．来年度の全国大会にむけて

来年度第 76 回大会は、2026 年 11 月 14 日・15 日（土・日）、岡山大学（代表：石井友美会員）で開催されます。ワークショップ、および分科会研究発表・ポスター研究発表の応募期間等の重要事項については、決まり次第、学会ウェブサイトにてお知らせします。

開催準備及び大会運営に関しては、今年度の経験をふまえて改善を進めてまいりますが、引き続き会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

（大会運営委員会）

# ラマール・クリスティーン先生への名誉会員称号授与にあたって

（小嶋美由紀）

ラマール・クリスティーン（Christine Lamarre）先生は、フランスと日本の両国において、言語学・中国語学分野の修士・博士の学位を取得されたのち、大阪女子大学、東京大学などで現代中国語文法、方言学を中心とした中国語学の研究と教育に、長きにわたり尽力されてきました。2009年9月にフランス国立東洋言語文化学院（INALCO）に拠点を移された後も研究と教育に邁進され、その功績を高く評価されて同学院の名誉教授の称号を授与されました。

先生の研究は、中国語の内と外の両面から、中国語の本質を明らかにしようとする研究姿勢に特徴があります。中国語の内側からの研究は、主に河北省や陝西省の官話方言や客家語などの中国諸方言にみられる文法形式を、ご自身の現地調査に基づき共時的に、また歴史的文献を用いて文法化の観点から通時的に分析することにより、普通話も含めた中国語全体の言語変化を俯瞰的に捉える試みのことを指します。代表的な論文に、「从普通话里跟“得”有关的几个格式去探讨方言类型学」(2001年)、「从趋向范畴的方言表述看“书面汉语中的不

同层次”的判定」(2007年)などがあります。中国語の外側からの研究は、中国語を他言語と比較することで、一般言語学的知見や理論的枠組みを用い、類型論的に中国語の独自性を探る試みを指します。特に、先生が長年にわたって最も精力を傾けておられる、中国語の空間移動表現に関する研究では、タルミーの枠づけ類型論における中国語の位置づけを、緻密なデータに基づいて批判的に考察し、新たな視点や可能性を提示する示唆に富んだものであり、国内外から高く評価されています（The Linguistic Categorization of Deictic Direction in Chinese: With Reference to Japanese, 2008年、中国語の移動表現，2017年など)。近年は、「ある目的を持って移動してそれを遂行する」という意味を表す移動と目的行為が一体化した事象構造（associated motion）についても精力的に研究を進めておられ、タルミーの移動表現の類型の枠を超えた新しい類型論的枠組みの構築を目指されています（An Associated Motion Approach to Northern Mandarin MOTION-CUM-PURPOSE Patterns, 2020年）。

ラマール先生の研究は、前述したトピック以外にも、可能補語（北方官话里表示可能的动词词尾“了”，1995年）、習慣相（汉语里标注惯常动作的形式，2005年）、一回相（Chinese semelfactives and body movements, 2015年）といったアスペクトやモダリティに関連する多岐にわたるテーマを扱っています。さらに、Hilary Chappell氏と共同で出版された19世紀の宣教師が書いた文法書と辞書（ドイツ語）の初めての英語訳（*A Grammar and Lexicon of Hakka: Historical Materials from The Basel Mission Library*）は、客家語を研究する上で貴重な資料です（https://inalco.hal.science/hal-01386151）。

先生は1983年に本学会へ入会され、2003-2005年度には学会理事を、2004-2006年度には学会誌『中国語学』の編集委員を務められました。また、本学会会員を含む多くの研究者の育成に尽力され、我が国の中国語学研究に多大な貢献をされました。以上のように、ラマール先生の研究面・教育面、ならびに本学会への貢献は顕著であり、2025年度大会において、名誉会員称号の授与が承認されました。

## 理事選挙開票結果報告

2025 年 11 月 1 日～2025 年 11 月 7 日にオンラインにて理事選挙が行われました。開票の結果、以下の方々が次期（2026-27 年度）会長および理事に当選されました。

副会長は、後日新会長が理事の中から委嘱することになります。当選者並びに各得票数は以下の通りです。

■投票総数：524 票（うち、有効投票総数 468 票、白票 56 票）

■得票数：

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 松江　崇 | 45（会長） |
| 2. | 下地早智子 | 36 |
| 3. | 丸尾　誠 | 32 |
| 4. | 伊藤さとみ | 30 |
| 5. | 加藤　晴子 | 26 |
| 6. | 吉川　雅之 | 24 |
| 7. | 遠藤　雅裕 | 20 |
| 8. | 石村　広 | 17（以上理事） |
| 次点 | 橋本永貢子 | 11 |

（選挙管理委員長　鋤田智彦）

## 研究例会実施報告　2025.7 - 2025.12

### ◆第 2 回研究例会

◇2025 年 8 月 9 日（土）午後 1 時～、オンライン（Zoom）での開催

・馮一峰（京都外国語大学）：中国語における転送出力形成の統辞的制約―φ素性均衡の構築を目的とした統辞操作の不適用に関する検証―

Narita and Fukui（2022）は、対称性原理に基づき、転送出力の形成方法として二つのアプローチを提案している。第一は、素性均衡を構築する方法であり、第二は、統辞体 SO の構成素 α およびβがいかなる形式素性も持たないという方法である。Narita and Fukui（2022）は、英語では第一の方法が多く用いられている一方で、日本語のレキシコンにはφ素性が存在しないため、φ素性均衡の構築を目的とした統辞操作は適用されないと主張している。本研究では、日本語と同様に顕在的なφ素性を持たないとされる中国語においても、φ素性均衡を構築するための統辞操作が適用されないとの推測を検証する。

・大町綺霞（神戸市外国語大学／北京語言大学・院）：“没有”的语用否定用法及其演化路径

“没有”是现代汉语中最为重要的否定词之一。然而，在日常口语交际中，“没有”也有否定义弱化甚至完全失去否定义的用法。本文基于语料调查结果，从语用否定的角度出发，对否定义虚化的“没有”的用法加以梳理、归纳，并对其演化路径做出分析。认为“没有”否定义的弱化乃至消失是循着由客观事实的对立到主观认知的对立，再到篇章内容的对立，直到最后失去明确的对立的路径逐次完成的。其在不同的语篇位置上呈现不同的话语功能。最后，还将对比分析“没有”与“不是”的此类特殊用法，明确二者的语用特征差异。

・河原畑希久（立命館アジア太平洋大学・嘱託講師）：対象介詞“给”と“为”にみる受益構文の統語的制約と語用的機能―発話態度における関与と行為主調整の視点から―

本発表では、中国語の対象介詞“给”と“为”に見られる受益構文の語順および主題役割に着目し、劉丹青（2013）の統語類型論を基に両者の語用的機能を分析する。“给”は主に受領者を導き、その語順や文脈によって話者の関与度や与益の焦点が変化する。一方、“为”は目的や配慮対象を導き、動機の提示や行為主の明示性調整を通じて配慮的態度を示す。本研究は両介詞の統語的特徴と語用的機能を比較し、発話態度における関与の程度および行為主の表出様式を明らかにすることを試みる。

・永江貴子（拓殖大学）：受益者を導く介詞としての“帮”に関する一考察

現代中国語において“帮”は「助ける」を意味する動詞として扱われてきたが、近年では受益者を導く介詞としての用法も指摘されている（余义兵 2023 ほか）。言語学においては、既存の形式や用法が新たな形式の出現を妨げる現象を“Lexical Blocking”と呼ぶが、“给”“为”“替”といった既存の受益者マーカーがあるにもかかわらず、なぜ“帮”がそうした機能を担うようになりつつあるのか。本発表では、“帮”の虚化に注目し、実際の用例分析と地域差・世代差をふまえた調査結果を通して、その機能的拡張の実態を概観し、考察する。

・黄海萍（慶応義塾大学）：チワン語における比較表現と中国語「比」構文の対照研究

本発表では、中国最大の少数民族であるチワン族が話すチワン語（主に龍茗方言）における比較表現を取り上げる。チワン語には、比較標識を用いない暗示的な比較表現と、比較標識 kwa:³ および pi:⁵を用いた明示的な比較表現の 2 種類が存在する。本研究では、特に比較標識を用いる比較表現に注目し、中国語における「比」を用いた比較表現との対照を通して、両者の構文的・語用的特徴の異同を明らかにすることを試みる。

・周云（北九州市立大学・非）：“上下”による時間認知の考察

本発表では、先行研究を踏まえ、認知言語学的理論を用いて、中国語における“上下”による時間概念・時間表現の特徴に基づき、“上”→“下”という時間方向性の認知的根拠（依拠するメタファー）、“上下”による時間認知の有界性が生じる認知的理由、及び“上下”時間認知が方向性よりも時間幅を表現する傾向における認知的メカニズムについて、新たに解釈するとともに、“前后”時間軸との相違点を考察する。本稿では、時間の方向性と有界性がそれぞれ異なるメタファーに依拠するという立場から、“上下”時間軸を 2 段階で分析する。

・羅攀（神戸市外国語大学・院）：概念分形视阈下转喻与隐喻的认知图式及其理论应用初探

分形是数学领域研究不规则几何图形的重要理论之一。释义循环与百科网络分别反映了概念具有迭代性与自相似性等分形几何所持有的两大核心特征，因此概念也一种分形，其分形元（或生成元）为概念的表象。概念分形视域下，转喻认知图式所呈现的喻体替换本体的可能性与生成性分别基于概念与表象之间的迭代性与自相似性；隐喻认知图式所呈现的喻体映射本体的实现过程则基于本体、喻体二者与共同表象之间的迭代性与自相似性。转喻与隐喻认知图式的理论应用主要涉及三个方面：印证转喻与隐喻在语义真值层面的还原性特征；支持“隐喻=N 转喻”的假设；描写汉语“概念类型转化”的认知过程。

**◆第 3 回研究例会**

◇2025 年 10 月 4 日（土）午後 1 時～、オンライン（Zoom）での開催

・張志豪（名古屋大学・院）：“把书买了”の成立条件について

“把 OV 了”構文には、消失義動詞（“卖”など）は使用できるが、獲得義動詞（“买”など）は使用できないとされてきた。実際には、“把书买了”のように獲得義動詞を用いる用例も多く観察される。本報告では、獲得義動詞を視野に、“界变”の観点から、“把 OV 了”構文の成立条件を明確にした。まず、“把 OV 了”における“V 了”は“结果性界变”を表す必要があるという指摘を掘り下げ、“V 了”が“结果性界变”を表すには＜状態 A＞（“没 V”）が必要であることを明確にした。その上で、消失義動詞は＜状態 A＞を内包しているため、文脈において示さなくてもよい一方、獲得義動詞には＜状態 A＞がなく、文脈において示す必要があることも明確にした。

・鄭欣悦（宝鶏文理学院）：定語の成立条件と特徴：動詞の重ね型が定語になる場合を中心に

定語とは名詞を修飾する連体修飾語であり、さまざまな品詞やフレーズによって担われうる。その中でも、動詞の重ね型が定語として使用される場合には、成立する用例と（○试一试的心态。○点点头的事。○说说笑笑的年轻人。）、成立しない用例（＊看看的书。＊研究研究的问

題。＊敲了敲的门。＊想一想的事。）の両方が見て取られる。本発表では、六種類の動詞の重ね型（AA 型、A 一 A 型、A 了 A 型、AAB 型、ABAB 型、AABB 型）を対象として取り上げ、それぞれの型が定語になる成立条件やその特徴について考察し、そこから定語の本質に迫ることを目的とする。

・楊琴（奈良女子大学・博士研究員）：古代中国における漢語「人倫」の意味について：「倫」字を中心に

「人倫」は中国では古い時代から用いられ、一般的に『孟子』に書かれる、儒教における五つの徳目「五倫」の意と理解される。しかし日本ではそれと異なる意味で用いられ、中世には一般的に「人」を表すようになる。本発表では「人倫」の意味領域が日中両言語で異なっていく過程・原因を究明するための基礎作業として、まず『説文解字』にみえる「倫」字の訓詁を参考にし、古代中国における「倫」の本来の用法が如何なるものかを調査する。また、「十三経」所収文献などにおける「倫」の使用分布を概観し、その用法や注釈家の訓詁を整理検討した結果を通じて、古代中国の「倫」の多義的な意味拡張の実態についての考察を試みる。

・楊一鳴（愛知大学・国際中国学研究センター研究員）：近代宣教師が編纂した漢字教材：「音符字典」を中心に

明清時代において、入華宣教師たちは布教活動や日常生活のため、中国語の習得を課題とし、漢字学習は最初の関門であった。宣教師によって編纂された字典は、最も広く利用された漢字教材であり、その配列方式は部首や音節を基準とするのが一般であった。19 世紀に入ると、J.マーシュマンや J. M.カレリーをはじめとする宣教師たちは、漢字の音符に着目し、漢字の起源や構成を分析しようと試みた。さらに、音符に基づいて配列した辞書や漢字教材も数多く残された。本発表では、J.マシュマンや J. M.ギャラリーの漢字観を探る上で、近代宣教師が編纂した「音符字典」の成立と特徴を考察する。

**◆第 4 回研究例会**

◇2025 年 12 月 13 日（土）午後 1 時～、関西大学千里山キャンパス以文館 4 階セミナースペース（対面方式とオンライン方式の併用）

○シンポジウム：漢語諸語における文末標識の様相

・ラマール・クリスティーン（フランス国立東洋言語文化学院・名誉教授）：従属節に後置する西北方言の“咾着”をめぐって

本発表では、陝西省関中方言（中原官話）の“咾着”が従属節に後置して接続機能をもつ文を考察する（例：“等房子盖好咾着，咱就往一搭里搬” 家が完成したら、新居に引っ越して一緒に住もう）。更に次の会話の乙の返事のように、同じ形式が複文の主節の省略によって文末助詞のように用いられるという現象も取り上げる；甲：“给我帮{一个}忙！”（ちょっと手伝ってくれない？）乙：“一时儿咾着”（少したったらね）。考察の際には、“着”の助詞用法に加え、“咾”の完了用法と非現実ムードを表す機能の関連も検討する。

・鈴木博之（京都大学）：西南官話における非直接情報を表す文末標識“说”

西南官話で文末に現れる“说”は本義の「言う」から派生し文法化した、証拠性に関わる文末

標識である。その中核的な意味が「伝聞」の事例は複数地点で確認される。一方、チベット系諸言語を母語とする西南官話話者は“说”を「感知」「推測」の意味で使う場合がある。特に内的感覚（endopathic）動詞は、漢語全体では人称によらず使われるが、西南官話では非自己を主題（経験者；undergoer）とする場合“说”を用いる事がある。これは当該話者の母語・チベット系言語の文法体系を反映するが、チベット系の標識は「言う」でなく「聞く」に由来することから、“说”の使用は文法カテゴリーだけをコピーした翻訳借用と考える。

・李佳樑（東京大学）：上海語の文末形式“得来”と“头势”の再検討

上海語の“得来 təʔ$^{5}$lɛ$^{13}$”と“头势 dɤ$^{22}$sɿ$^{44}$”は、形容詞や動詞の直後に生起し、感嘆文の述語を形成する。本発表では、先行研究の知見を再検証し、これらの文末形式の形態論的・品詞論的な位置付けを整理する。また、程度副詞による修飾や様態補語・程度補語との対照を通じて、文末形式独自の機能を明らかにする。その上で、話題として投げかけた特定の属性の程度の甚だしさを聞き手が補完する余地を形式的に確保する点に、“得来”と“头势”の意味機能の核心があることを示す。

・飯田真紀（東京都立大学）：広東語の文末助詞 me1 の音調と意味機能

広東語において疑問文末助詞とされる me1 は、平叙文の末尾に付加され、命題成立への驚きや疑いといった伝達的意味を表す。広東語では文末助詞も固有の声調があり、me1 は第 1 声（高平調[55]）を持つと表記されるが、文末助詞における声調というのは多分にイントネーションが顕現したものであると見られる。me1 については、高平調[55]だけでなく下降調[53]の変異形を持つことが指摘されており、両者は異なる文法的振る舞いを見せる。本発表では me1 における 55 調と 53 調の意味機能の違いを検討し、併せて日本語の終助詞のイントネーションとの類似性を探る。

**◆第 5 回研究例会**

◇2025 年 12 月 20 日（土）午後 1 時～、オンライン（Zoom）での開催

・陳頌頌（熊本大学・院）：“虽然小句”の談話機能について

中国語会話において、“虽然小句”は文脈による推論や共有情報を通じて“复句”（複文）の枠組みから離れ、独立した文として成立し、意味上の完全性を有しているという研究は進展を見せている。しかし、ターン交替における機能や、聞き手のフィードバックによる調整作用などといった動的な相互行為の観点からの検討は十分になされていない。そこで本発表では、日常会話、ネット言語など多領域のコーパスから採集した“虽然小句”をデータとし、聞き手の反応も含めて観察した上で、“虽然小句”が話し手のスタンスの主張、意思疎通の促進といった多様な語用論的意図を反映していることを分析する。

・王一萍（福岡大学）：清末民初の上海方言における〈洗う〉に関わる単音節動詞の意味分析―『滬語便商』の用例を中心に―

現代上海方言において、「洗う」に相当する動詞は主に“汰[da$^{13}$]”であり、衣類・食器・身体など多くの対象に幅広く用いられている。それに対し、清末民初の上海方言では、「洗う」に関わる単音節動詞として、“净”“盪（荡）”“捕”“过”“浴”“湔”“揩”“洗”などが

確認されるが、これらの動詞が指し示す動作には細かな差異が存在する。本発表では、御幡雅文による上海語教科書『滬語便商』を中心に、その前後時期の文献資料も参照しつつ、「洗う」に関わる単音節動詞を取り上げ、符淮青（2006）の「意味構造モデル」に基づく分析方法を用いて考察を行うことで、これらの動詞に見られる意味的差異を解明する。

・川澄哲也（九州大学）:『元朝秘史』漢訳部分における第 1 人称「複数」代名詞をめぐって

2003 年、『元朝秘史』（及び旧本『老乞大』）における第 1 人称複数代名詞“俺”と“咱（每）”の用法に関し、栗林均氏と故佐藤晴彦氏は各々の観点から異なる見解を発表した。栗林氏は『元朝秘史』モンゴル語本文と漢語傍訳の対応に基づき、両者には排除／包括式の区別があったと主張したのに対し、佐藤氏はより体系的な視点に立ち、両者の使い分けは必ずしも厳密ではなかったと主張した。そしてそれぞれの論考で、自らの考えを検証するために今後取り組むべき作業を提示した。しかしその後今日まで、当該作業が実施されたことを聞かない。本発表ではこの 2 つの作業に取り組むことを出発点とし、両氏の見解の妥当性について検証する。

## 会議報告

**■ 2025 年度第 2 回理事会**

日時 : 2025 年 11 月 7 日（金）16 時～18 時

場所 : 東北大学川内キャンパス C エリア文学研究科棟 3 階 335「中会議室」

出席者 : 佐々木勲人（会長）; 松江崇（副会長）; 伊藤さとみ、加藤晴子、山崎直樹（以上理事）; 伊藤さとみ（編集委員長 [兼任]）; 石崎博志（大会運営委員長）; 鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）; 今村圭、上田裕、金佳（以上幹事）

欠席者 : 下地早智子（理事兼学界展望編集委員長）; 鈴木慶夏、三宅登之（以上理事）

**■ 2025 年度評議会**

日時 : 2025 年 11 月 8 日（土）10 時 15 分～11 時 45 分

場所:東北大学川内キャンパス講義棟 C棟 2階 C205

出席者 : 構成員 36 名（定数 64 名）

**■ 2025 年度総会**

日時 : 2025 年 11 月 8 日（土）17 時 30 分～18 時 15 分

場所:東北大学川内キャンパス講義棟 C棟 2階 C200

**【報告事項】**

1. 一般報告

1.1. 役員・委員等の異動

なし

1.2. 会員動向（10 月 1 日現在）

今村幹事より以下の報告があった。

- 会員数（2024 年 10 月 1 日から 1 年間の増減 : 住所不明者、年度末退会予定者を含む）

| | | | 増減 |
|---|---|---|---|
| 総会員数（賛助会員をのぞく） | | 894 名 | −17 |
| | （内訳） 顧問 | 10 名 | ＋0 |
| | 名誉会員 | 9 名 | −1 |
| | 通常会員 | 791 名 | −26 |
| | 団体会員 | 4 名 | ±0 |
| | 海外会員 | 80 名 | ＋10 |
| 賛助会員 | | 19 社 | ±0 |

・〔昨年度除籍者〕32 名（国内会員 26 名 / 海外会員 6 名）［2024 年 11 月 5 日付］

・〔今年度除籍予定者〕37 名（国内会員 31 名 / 海外会員 6 名）
・ご逝去　1 名（平山久雄名誉会員）

1.3. 支部関連

2024 年度の支部例会の実績は『中国語学』272 号「彙報」を参照

2025 年度の研究例会は以下のとおり：

実施済み（大会開催時点）：第 1 回（6 月 7 日）、第 2 回（8 月 9 日）、第 3 回（10 月 4 日）に実施

## 2. 編集委員会報告

2.1. 2025 年度第 2 回理事会

伊藤委員長より以下の報告があった。

・『中国語学』第 272 号は 2025 年 10 月 31 日に 1,050 部を発行した。
・今年度の学会奨励賞受賞者は審議の結果、該当者なしとした。
・『中国語学』の活性化の取り組みについて、以下を第一回理事会にて承認され、273 号より適用することになった。1）査読システムの可視化のために『中国語学』査読指針を新たに作成、2）投稿論文の質の向上・採択率の向上を目指し、投稿規程の論文修正期間を一ヶ月から一ヶ月半に延長した。3）校正期間短縮のために、執筆要領の参考文献部分について詳細化した。いずれも 272 号に掲載された。

（編集委員会）

## 3. 大会運営委員会報告

石崎委員長より以下の報告があった。

3.1. 今年度大会の開催について

3.1.1. ワークショップ審査結果

5 月 31 日（土）に応募を締め切った。応募総数 1 件で、「多言語対照にみられる形容詞の主観性の諸相―日本語、中国語、英語、東アジアの言語を対象に―」（企画者：王安会員、4 名による発表）を審議の結果、採用した（6 月 7 日持ち回り委員会決定）。申込後、お一人の発表者（非会員）が体調不良により辞退されたため、3 名による発表を委員会で承認した（8 月 20 日持ち回り委員会決定）。

3.1.2. 招待発表について

前回大会に続き、招待発表を行うことになった。今回は 2 日目の分科会に本企画を組み込み、委員からの推薦により以下の理事・会員に発表を依頼した。

（1） 石村広会員：「自動と使動の対立から見た使成式の形成について」
（2） 下地早智子理事：「現代中国語における垂直系時間名詞（句）の起点領域」

本大会は対面形式のみで開催することを予定していたが、下地理事に不測の事態が生じ、下地理事のみ米国からオンラインとした。発表時間と予稿集の分量は一般発表との差別化をはかり、1 人 45 分・上限 8 枚としたが、実施方法については引き続き検討する。

3.1.3. 研究発表（分科会・ポスター）応募・採択結果

応募は今年度もフォーム（form.run）を利用し、6 月 30 日（月）にエントリを締め切った。応募総数 90 件。内、有効応募総数 88 件、不受理 2 件（フォーム外での応募）。失格件数 5 件（重大な書式違反）。全委員による査読と審議の結果、口頭発表 47 件、ポスター発表 7 件の計 54 件を採択した。不採択数は 34 件。（7 月 25 日持ち回り委員会決定）

採択結果公表後、辞退の申し出が 1 件（10 月 27 日）あった。委員会で審議の結果、「やむをえない事情」とし、採択の取り消しを決定した。（10 月 28 日持ち回り委員会決定）

3.1.4. 予稿集について

原稿は今年度もフォーム（form.run）を利用し、9 月 30 日（火）に提出を締め切った。締め切り後の提出は 1 編のみで、翌日早朝に委員長のメールアドレスへ提出された。予稿集の受付・編集には委員 8 名が当たり、提出原稿にはテーマの文言が申込時と異なるものや word 原稿の誤送付があったが、発表者に修正のうえ再提出を求めた。また、軽微なものは予稿集作成チーム内で調整した。予稿集は、統合版（全編一括）と分割版（各稿別）の 2 種を作成し、いずれのファイルも改変防止のためパスワードで保護した。統合版では、「目次」および「しおり」から各稿の該当頁へ遷移でき、各予稿頁のタイトルと発表者名には「目次」へ復帰する内部リンクを設けた。予稿集は 10 月 14 日（火）に公開した。なお今年度はプログラムにおいて身分は不記載とし、予稿原稿頁への身分の記載は発表者の判断に委ねた。今後は予稿原稿への身分記載も検討したい。

3.1.5. 大会参加申し込みと参加費の支払いについて

昨年同様、イベント管理システム（Peatix）を利用し、事前の参加申し込みおよび参加費の徴収を行った。参加費は前年同様としたが、近年の物価高騰により懇親会費と 2 日目の弁当代は値上げした。9 月 26 日（金）に学会ウェブサイトに掲載し、10 月 10 日（金）および 10 月 24 日（金）に事務局からリマインドメールを送付した。

3.2. 第 76 回大会について

［日　　程］2026 年 11 月 14・15 日（土・日）
［開 催 校］岡山大学津島キャンパス
（岡山県岡山市）
［代 表 者］石井友美会員
［開催形態］対面

3.3. 委員の交代

第 75 回大会終了後、12 月 1 日より開催校代表委員を交代する。

退任：張佩茹会員（東北大；2025 年開催校代表）
野原将揮会員（京都大）
戸内俊介会員（日本大）

就任：石井友美会員（岡山大；2026 年開催校代表）
三木夏華会員（鹿児島大）
望月雄介会員（松山大学）

## 4. 学界展望編集委員会報告

4.1. 2024 年「学界展望　語学」の編集

2024 年の学界展望は、2025 年 10 月 12 日発行の『日本中國學會報』第七十七集に掲載され、また 2025 年 10 月 31 日発行の『中国語学』第 272 号に転載された。

4.2. 委員の交代について

2025 年および 2026 年学界展望担当委員を次のように交代する。

「文字・訓詁」（旧）宮島和也委員から（新）市原靖久会員（東京大学）
「語彙・語法（上中古）」（旧）楊安娜委員から（新）髙柳浩平会員（中央大学）
「語彙・語法（近代）」（旧）永井崇弘委員から（新）伊伏啓子会員（福岡大学）
「教育」（旧）小川典子委員から（新）西香織会員（明治学院大学）

2025 年および 2026 年学界展望は以下の体制により編集することになる。

「音韻」：更科慎一（山口大学）
「文字・訓詁」：市原靖久（東京大学）
「語彙・文法（上中古）」：髙柳浩平（中央大学）
「語彙・文法（近世）」：伊伏啓子（福岡大学）
「語彙・文法（現代）」：前田真砂美（奈良女子大学）

「方言」：鈴木史己（南山大学）
「教育」：西香織（明治学院大学）

なお、新委員長については第 75 回大会以後に決定される。

以上は 2025 年度第 1 回日本中国語学会学界展望編集委員会（10 月 9 日～10 月 16 日メール審議）により承認された。

4.3. 2024 年「学界展望　語学」の中国語版

中国社会科学院が作成した 2024 年「学界展望語学」中国語版を日本中国学会報《学界展望》中国語版翻訳補助チームのメンバーとして季鈞菲会員と下地が点検した。

4.4. その他

委員の任期を現行の 4 年間から 2 年間に変更することについて検討を行った。この変更は執筆者が探しにくいことと矛盾するのではないかという意見があり、領域を合併、整理する等の提案があった。若手研究者の育成や、これを執筆者の研究業績とする方針は維持しつつ、持続可能な方策を引き続き検討することとなった。

## 5. 中国語学セミナーについて

山崎理事より以下の報告があった。

第 7 回中国語学セミナーを以下のとおり開催した。

（1）開催形態：オンライン（Zoom）開催
（2）開催日：2025 年 9 月 6 日（土）13:00-17:00
（3）講師と題目：
吉川雅之（東京大学）：ラテン文字表記法の展開：発音の可視化とその先
沈力（同志社大学）：「尷什么尬」から見る中国語における形態素の単音節性
（4）聴講料：無料
（5）参加者：133 名

・アンケート結果（51 件、うち非会員 5 件）
（1）講義数について
例年と同様に「2 講義が適当」と回答した受講者が圧倒的多数（84.3%）を占めた。なお、前半のみ受講した参加者はほとんどが「1 講義が良い」と回答しており、受講時間に応じた傾向がみられた。
（2）講義分野・テーマについて
文法関連の講義が中心であったが、特定分野への偏りは見られず、参加者の関心は比較的広範囲に分布していた。
（3）講師評価（吉川先生・沈先生）
両講師の講義については、全体の 8 割以上が「非常に理解しやすい」「やや理解しやすい」と回答しており、高い評価が得られた。
（4）受講者の所属・会員状況
所属支部は関東支部、関西四国支部が多く、これに続いて「国内・非会員」の参加が確認された。今回のセミナーを契機として新規入会につながることが期待される。
（5）自由記述欄の意見
多くの受講者が講義内容に高い関心を示し、ピンイン体系や語の定義など、普段の研究領域を越えた視点から新たな示唆を得たとの感想が多く寄せられた。オンライン開催により参加しやすかったとの意見も複数見られ、今後も継続を希望する声があった。全体として、講義の質・テーマ構成ともに高く評価され、今後の研究や学習に役立てたいという前向きなコメントが大半を占めた。

## 6. 会長及び理事選出方法に関する内規の改定について

改定後の内規を以下に示し、改定箇所は太字で表記する。

(1)　会長及び理事の選出は，国内の**顧問，名誉会員，**通常会員の投票によるものとする。

(2)　投票は 4 名連記により行う。得票数上位 8 名を候補者とし，その内最高得票者を会長，その他の 7 名を理事の当選者とする。いずれも得票が同数の場合は，年長者を当選とする。ただし，会長当選者が，候補者の過半数がこれを是とする事由により，会長就任に支障ある場合は，候補者 8 名の互選により，会長を選出するものとする。

(3)　**会長**を務めた者は，次回以降の選挙において，理事の被選挙権をもたない。

**(4)　2 年を超えて会費の納入がない者は，選挙権および被選挙権をもたない。**

**(5)**　選挙は役員改選の年度に行い，理事会の承認を得て会長が委嘱した選挙管理委員会が管理運営するものとする。

**【審議事項】**

**1.　予算案・決算案**

1.1. 2024 年度会計決算案（資料参照）

上田幹事による報告と説明、及び神谷智幸会計監査による監査報告があり、原案の通り承認された。

1.2. 2025 年度会計補正予算案（資料参照）

上田幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

1.3. 2026 年度会計予算案（資料参照）

上田幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

**2.　顧問・名誉会員の推挙について**

ラマール・クリスティーン会員に名誉会員の称号を授与することが承認された。

2024 年度会計決算書（2024 年 4 月～2025 年 3 月）　　2025 年 11 月 8 日総会承認

## 日本中国語学会2024年度会計決算書（案）（2024年4月1日～2025年3月31日）

〈収入の部〉　　単位：円

| 収入 | 予算 | 決算 |
|---|---|---|
| 前年度繰越金 | 7, 280, 167 | 9, 400, 310 |
| 積立からの繰入金 | 4, 840, 000 | 4, 840, 000 |
| 通常会員・海外会員会費収入 | 5, 000, 000 | 4, 863, 612 |
| 賛助会員会費収入 | 600, 000 | 570, 000 |
| 『中国語学』売上金 | 400, 000 | 281, 564 |
| 学界展望補助金 | 300, 000 | 300, 000 |
| 中国語学辞典印税 | | 108, 955 |
| 定額貯金利子 | | 0 |
| 通常貯金利子 | | 2, 271 |
| 計 | 18, 420, 167 | 20, 366, 712 |

〈支出の部〉　　単位：円

| 支出 | 予算 | 決算 |
|---|---|---|
| 会誌印刷費 | 2, 000, 000 | 1, 547, 251 |
| 大会助成費 | 300, 000 | 145, 717 |
| 支部活動助成費 | 200, 000 | 84, 490 |
| 中国語学セミナー開催経費 | 200, 000 | 90, 000 |
| 通信費 | 300, 000 | 192, 789 |
| 事務費 | 2, 000, 000 | 1, 767, 155 |
| 大会事務費 | 300, 000 | 0 |
| 学会連合等年会費 | 30, 000 | 32, 000 |
| 事務局費 | 450, 000 | 400, 000 |
| 編集委員会経費 | 120, 000 | 120, 000 |
| 学界展望編集委員会経費 | 300, 000 | 300, 000 |
| ウェブリソース委員会経費 | 120, 000 | 106, 494 |
| ホームページ関連経費 | 180, 000 | 6, 860 |
| 大会運営委員会経費 | 220, 000 | 151, 152 |
| 旅費交通費 | 700, 000 | 339, 000 |
| 会議費等雑費 | 180, 000 | 125, 982 |
| 学会奨励賞 | 100, 000 | 0 |
| 積立金<br>[内訳]<br>記念大会積立金（48万）<br>事務委託関係積立金（140万）<br>ウェブサイト構築積立金（50万）<br>国際会議開催支援積立金（50万）<br>コロナ禍基金（200万） | 4, 880, 000 | 4, 880, 000 |
| 予備費 | 5, 840, 167 | 10, 077, 822 |
| 計 | 18, 420, 167 | 20, 366, 712 |

監査の結果、経理内容は適切であり、経理諸表は的確に処理されているものと認めます。

2025年7月13日

2024年度会計監査　神谷 智幸

2024年度会計監査　永江 貴子

## 2025 年度会計補正予算案（2025 年 4 月～2026 年 3 月）　2025 年 11 月 8 日総会承認

2025年度会計補正予算案（2025年4月～2026年3月）

単位：円

| ＜収入＞ | |
|---|---|
| 前年度繰越金 | 10,077,822 |
| 積立からの繰入金 | 4,880,000 |
| 通常会員・海外会員会費収入 | 5,000,000 |
| 賛助会員会費収入 | 600,000 |
| 『中国語学』売上金 | 300,000 |
| 学界展望補助金 | 300,000 |
| 計 | 21,157,822 |

| ＜支出＞ | |
|---|---|
| 会誌印刷費 | 2,000,000 |
| 大会助成費 | 400,000 |
| 支部活動助成費 | 200,000 |
| 中国語学セミナー開催経費 | 100,000 |
| 通信費 | 300,000 |
| 事務費 | 2,000,000 |
| 大会事務費 | 300,000 |
| 学会連合等年会費 | 30,000 |
| 事務局費 | 450,000 |
| 編集委員会経費 | 120,000 |
| 学界展望編集委員会経費 | 300,000 |
| ウェブリソース委員会経費 | 120,000 |
| ホームページ関連経費 | 180,000 |
| 大会運営委員会経費 | 200,000 |
| 選挙関連費 | 300,000 |
| 旅費交通費 | 700,000 |
| 会議費等雑費 | 180,000 |
| 学会奨励賞 | 100,000 |
| 『中国語学』アーカイブ化関連経費 | 550,000 |
| 積立金 | 4,920,000 |
| [内訳] | |
| 記念大会積立金(50万) | |
| 事務委託関係積立金(142万) | |
| ウェブサイト構築等積立金(50万) | |
| 国際会議開催支援積立金(50万) | |
| コロナ禍基金（200万） | |
| 予備費 | 7,707,822 |
| 計 | 21,157,822 |

## 2026 年度会計予算案（2026 年 4 月～2027 年 3 月）　2025 年 11 月 8 日総会承認

2026年度会計予算案（2026年4月～2027年3月）

単位：円

| ＜収入＞ | |
|---|---|
| 前年度繰越金 | 7,707,822 |
| 積立からの繰入金 | 4,920,000 |
| 通常会員・海外会員会費収入 | 5,000,000 |
| 賛助会員会費収入 | 600,000 |
| 『中国語学』売上金 | 300,000 |
| 学界展望補助金 | 300,000 |
| 計 | 18,827,822 |

| ＜支出＞ | |
|---|---|
| 会誌印刷費 | 2,000,000 |
| 大会助成費 | 400,000 |
| 支部活動助成費 | 200,000 |
| 中国語学セミナー開催経費 | 100,000 |
| 通信費 | 300,000 |
| 事務費 | 2,000,000 |
| 大会事務費 | 300,000 |
| 学会連合等年会費 | 32,000 |
| 事務局費 | 450,000 |
| 編集委員会経費 | 120,000 |
| 学界展望編集委員会経費 | 300,000 |
| ウェブリソース委員会経費 | 120,000 |
| ホームページ関連経費 | 180,000 |
| 大会運営委員会経費 | 200,000 |
| 旅費交通費 | 700,000 |
| 会議費等雑費 | 180,000 |
| 学会奨励賞 | 100,000 |
| 積立金 | 4,960,000 |
| [内訳] | |
| 記念大会積立金(52万) | |
| 事務委託関係積立金(144万) | |
| ウェブサイト構築等積立金(50万) | |
| 国際会議開催支援積立金(50万) | |
| コロナ禍基金（200万） | |
| 予備費 | 6,185,822 |
| 計 | 18,827,822 |

## 研究例会および全国大会開催のお知らせ

### 今年度の研究例会実施予定

今年度の研究例会の実施予定は次のようになっています：

第 6 回：2026 年 1 月（中国支部担当）
第 7 回：2026 年 2 月（関東支部担当）
第 8 回：2026 年 3 月（北海道支部担当）

ひきつづき研究例会へのご参加を歓迎いたします。発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしています。この要旨は、学会ウェブサイト上の例会案内のページで紹介し、年に 2 回発行のニューズレターにも掲載されます。

なお、開催予定は変更になることもありますので、詳細は学会ウェブサイトをご参照ください。

（事務局）

### 第 76 回全国大会開催のお知らせ

日本中国語学会第 76 回全国大会は、2026 年 11 月 14・15 日に岡山大学津島キャンパス一般教育棟（岡山県岡山市）にて開催する予定です。

ワークショップおよび一般研究発表の応募要項については、決定次第学会ウェブサイトに掲載いたします。

（大会運営委員会）

## 事務局からのお知らせ

**『中国語学』273 号投稿論文募集**

『中国語学』第 273 号の投稿論文を募集しています。締切は 2026 年 3 月 10 日（火）です。投稿規程、執筆要領、テンプレートなどにつきましては学会サイトをご参照ください。
https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/journal/contribution.html

**顧問・名誉会員の推挙**

顧問・名誉会員の推挙は、推薦文を添えて2026年9月30日までに学会事務局宛にお願いします。

**住所不明の会員**

事務局より送付した郵便物が返送されてきた会員のお名前を掲げておきます。もし御自身のお名前を見つけられましたら、速やかに clara から住所変更の手続きを行ってください。またお知り合いの方のお名前がありましたら、事務局までご連絡をお願いします。

荒屋勸、泉興長、丁鋒、藤田益子、楊達、杜暉、張佳妮、王漫、王珍、李丹芸、アブリミテイマイラー、李仁治、林智、羅子皓、黄欣悦、章悦、王欣蕊

**2025 年度会費納入のお願い**

会費未納の方には、納入依頼のご連絡をメールでお送りしました。年会費（一般会員6,000円）を最寄りの郵便局からお振込ください。速やかにご入金くださいますよう、御協力をお願いします。

**郵便振替　　加入者名：日本中国語学会**
**口座番号：00980-6-282216**

オンラインクレジットカード決済も可能となっております。clara にログインの上、＜会費支払い状況確認＞からお支払いください。

**会員情報更新のお願い**

オンライン会員情報管理システム（clara）にアクセスして、ご自身の会員情報の確認と更新をお願いします。

**退会について**

退会は会費納付が前提となっています。退会希望の方は必ず会費納付後の年度内にお申し出ください。

**事務局の連絡先（2026 年 3 月まで）**

事務局への送付先は以下の通りです：

〒305-8571 茨城県つくば市天王台１-１-１
筑波大学人文社会系内
日本中国語学会事務局宛

また各種のお問い合わせは、学会ウェブサイト（https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/）内の「お問い合わせ」ページをご利用ください。

**日本中国語学会会報　2025 年秋季**
（年二回発行）
発行者：日本中国語学会事務局
〒305-8571 茨城県つくば市天王台
1-1-1 筑波大学人文社会系内
E-mail: jimukyok_clsj@chilin.jp
URL: https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/
発行日：2025 年 12 月 30 日